

## 受け容れる神

### [聖書] ヨハネによる福音書 18章 1～11節

こう話し終わると、イエスは弟子たちと一緒に、キドロン谷の向こうへ出て行かれた。そこには園があり、イエスは弟子たちとその中に入られた。イエスを裏切ろうとしていたユダも、その場所を知っていた。イエスは、弟子たちと共に度々ここに集まっておられたからである。それでユダは、一隊の兵士と、祭司長たちやファリサイ派の人々の遣わした下役たちを引き連れて、そこにやって来た。松明やともし火や武器を手にして、イエスは御自分の身に起こることを何もかも知っておられ、進み出て、「だれを捜しているのか」と言われた。彼らが「ナザレのイエスだ」と答えると、イエスは「わたしである」と言われた。イエスを裏切ろうとしていたユダも彼らと一緒にいた。イエスが「わたしである」と言われたとき、彼らは後ずさりして、地に倒れた。そこで、イエスが「だれを捜しているのか」と重ねてお尋ねになると、彼らは「ナザレのイエスだ」と言った。すると、イエスは言われた。「『わたしである』と言ったではないか。わたしを捜しているのなら、この人々は去らせなさい。」それは、「あなたが与えてくださった人を、わたしは一人も失いませんでした」と言われたイエスの言葉が実現するためであった。シモン・ペトロは剣を持っていたので、それを抜いて大祭司の手下に打ってかかり、その右の耳を切り落とした。手下の名はマルコスであった。イエスはペトロに言われた。「剣をさやに納めなさい。父がお与えになった杯は、飲むべきではないか。」

### [序] 「赤信号、みんなで渡れば怖くない」?

もう古典的なことわざのようになってしまった、もともとはお笑いの中から生まれてきた言葉に、「赤信号、みんなで渡れば怖くない」というものがあります。確かビートたけしが言い始めた言葉です。確かにこれは言い得て妙ですよ。聞いた時はうまいことを言うなあと、クスッと笑ってしまいますが、よくよく考えてみますと、怖い言葉だと思います。

「みんなで渡れば」と言います。“みんな”、横並びなのです。「これは間違っているのではないかと一人一人が思っている、それが横並びのようになって前進してしまうと、もう元に戻れなくなってしまうのです。一番分かりやすい例が「戦争」なのではないでしょうか。その意味で言うと、本当は「みんなでも」怖いのです。けれどもその中で「悪」や「罪」がかき消されてしまいます。別の言い方をすれば、「闇に乗じる」(「夜陰に乗じる」=乗っかる)ということです。

## [1] 「受難」のはじまり

今日の聖書の箇所、闇に乗じて、主イエス・キリストを、兵士や権力者の手下たちがこぞってやってきて捕らえるという場面です。そのすぐ前、17章までのイエス様の言葉や祈りがずっと記されていた所から打って変って、加速度的に、文字通り「受難」の出来事がここから進行して行きます。

今丁度、主の受難節、レントと呼ばれる季節を過ごしています。「受難」。文字通り、苦難を「受ける」ということです。イエス様はここで捕らわれるのですが、その逮捕の理由というものに正当な理由などはありませんでした。理由はでっち上げるしかなかったのです。とにかくこの目障りな男を捕らえたい。しかしイエス様は、ご自分が捕らえられるということを、弟子たちに既に何度も語られていました。例えば、マタイによる福音書の26章の初めのところには、今日のヨハネの記事につながる背景がくつきりと記されています。

「イエスはこれらの言葉をすべて語り終えると、弟子たちに言われた。「あなたがたも知っているとおりに、二日後は過越祭である。人の子は、十字架につけられるために引き渡される。」そのころ、祭司長たちや民の長老たちは、カイアファという大祭司の屋敷に集まり、計略を用いてイエスを捕らえ、殺そうと相談した。しかし彼らは、「民衆の中に騒ぎが起こるといけないから、祭りの間はやめておこう」と言っていた。」

それで今日の箇所に繋がるのです。その中では弟子のユダも利用されました。いや、利用されたと言うより、自らそのことに絡んで、イエス様逮捕の現場にまで捕らえる者たちを案内しました。しかし、主イエス様は、そのことさえも既にご存じでありながら、この事態を全く逃げずに受け容れているのです。

今日のヨハネ福音書18章はこう始まっていました。—「イエスは弟子たちと一緒に、キドロンの谷の向こうへ出て行かれた。そこには園があり、イエスは弟子たちとその中に入られた。イエスを裏切ろうとしていたユダも、その場所を知っていた。イエスは、弟子たちと共に度々ここに集まっておられたからである。」

夜の闇が支配している、キドロンの谷の向こうの園、ここでイエス様と弟子たちはかつて恐らく車座になって、イエス様の言葉に聞き、また祈っていたことでしょう。まるで天の国がそこに現れたかのような幸いな時間を弟子たちは持っていたことと思います。そこは他の福音書では「ゲツセマネの園」とも呼ばれる場所です。その「祈りの園」ともいえる場所が、まるでブルドーザーがやってきて無茶苦茶にするように、夜の闇に乗じて、兵士を含む大勢の者たちが、ただイエスを捕らえるために、松明や武器さえ手にしてやって来たのです。

## [2] 弟子たちに対する「この上ない愛」

この緊迫した場面の、主イエスと捕えに来た者たちとのやりとりは、ある意味逆転していると言ってよいと思います。「捕らわれる方」が堂々としていて、「捕らえる方」が動揺しているのです。このようにあります。4節以下です。

「イエスは御自分の身に起こることを何もかも知っておられ、進み出て、「だれを捜しているのか」と言われた。彼らが「ナザレのイエスだ」と答えると、イエスは「わたしである」と言われた。イエスを裏切ろうとしていたユダも彼らと一緒にいた。イエスが「わたしである」と言われたとき、彼らは後ずさりして、地に倒れた。そこで、イエスが「だれを捜しているのか」と重ねてお尋ねになると、彼らは「ナザレのイエスだ」と言った。すると、イエスは言われた。「『わたしである』と言ったではないか。わたしを捜しているのなら、この人々は去らせなさい。」

やってきた者たちは、力を誇示するようになりかなりの数でした。しかし集められたこの兵士や下役たちは、言ってみればただ命令に従っているだけです。「こんな夜にこんな仕事をさせられて…」と思っていたかもしれせん。イエスに対する憎しみなど無かったと思います。ですから逆に「誰を捜しているのか」と当のイエス様から尋ねられた時には怯んでしまったのではないのでしょうか？そしてイエスが、「わたしである」と毅然と言われた時（これは出エジプト記の中の、モーセに神様が現れ、「わたしは有って有る者」と言わたのと同じ意味を持つ）、彼らはそこに神ご自身の圧倒的な力を感じ、それに打たれ、立っていられなくなっていました。「彼らは後ずさりして、地に倒れた」とあります。イエスの勝利です。これで勝負はあったのです。神様の権威は、人間の、闇に乗じた姑息な計略などびくともしないのです。

しかし、ここで主イエスは、その大いなる神の権能によって彼らを打ち叩き、自分はその場を去っていくということはなさいませんでした。その理由はハッキリしています。4節に「イエスは御自分の身に起こることを何もかも知っておられ」とありました。主は、ご存じのようにあのゲツセマネの園で、神様との間で、祈りに祈って、遂に「わたしの思いではなく、御心が成りますように」と、神様の御計画、御心に委ねる決心をされたのです。それは、かねてから予告されていた通り、十字架でご自分の命をささげる、ということです。そのことを主イエスご自身がご自分で決意され、受容されたのです。

ですから主イエスはここで、誰をも怒ったり責めたりしていません。ただこう言われました。「イエスは言われた。「『わたしである』と言ったではないか。わたしを

捜しているのなら、この人々は去らせなさい。」—さあ、あなた方のなすべきことをするがよい。弟子たちには触れず、わたしだけを捕らえよと。凜とした声が響いたでしょう。時は定まりました。今ここに至って、神様の御計画の大きな歯車が、音をたてて最後の回転を始めたと言って良いのかと思います。

### [3] 全否定しない神

このような夜の出来事の中でシモン・ペトロの取った行動はとても考えさせられます。イエス様を捕らえようとした人物の一人だったので、マルコスという大祭司の手下に向かって、ペトロは多分漁師として持っていた剣を振るって、右の耳を切りつけたのです。勇敢な行動と思うのでしょうか？私もこれまで、イエス様に対する愛がそのような行動に駆り立てた、しかしイエス様は、ペトロ個人のその性急な思いをたしなめられた事なのではないかと思っていました。

しかし、私はある説教の言葉を読んでハッとさせられました。小島誠志牧師（日本基督教団元総会議長、久万教会牧師）の書かれた「聖句断想」の小説教です。（『朝のみちしるべ』教文館発行）。短いのでお読み致します。週報にも引用させて頂きました。

＜ペトロは決死の覚悟で剣を振りました。押し迫ってくる者たちの卑怯卑劣が我慢出来なかったからであります。しかし、イエスはペトロの戦いを制止されました。そういう人間たちを切り捨てたとしても、問題は解決しないからであります。

わたしたちを取り巻く悪人たちをみんな切り捨てたら問題は解決するか。解決しないのです。深刻な問題は自分を含めた人間すべての中にあるからです。

この問題を解決するために、救い主は自らを神の審きの下に置かれるのです。神の子の受難を外にして人間の救いはどこにもありません＞

本当に考えさせられる言葉（メッセージ）ではないでしょうか。

今、イエス様は黙って、ご自分に与えられた杯（父なる神様からの使命）を飲み干そうとされています。そこには十字架が待っています。一方ペトロは、自分の正義感ゆえにこの下役を切りつけました。イエス様がおっしゃった言葉は「剣をさやに納めなさい」でした。「剣」。私たちは自分の剣を隠し持っているのではないのでしょうか。そしてその剣は収まりが利かなくなる時があるのではないのでしょうか？—「あいつはいなくなった方が良い」という剣です。「あんな罪を犯した者は万死に値する」と考えてしまう剣です。いわゆる「全否定する剣」です。「全否定」はとても痛快ですよね。しかし、それは良く立ち止まって考えなければならないな、と思いました。正しさの中に潜む罪があるのではないのでしょうか。

私は、今の社会がとてもギスギスしかねない要因は、この「全否定」に、簡単に人の心が傾いてしまうからではないかなと思います。「受け容れられている」という実感がなかなか持てない世の中だと言っても良いと思います。また、自分で自分に対してその剣を振るってしまい、追い込んでしまうこともあるかも知れません。そのような私たちにイエス様は言われます。「あなたの剣をさやに納めなさい」と。剣を振るうことをやめて、わたしの愛の中にとどまっていなさい。私が本当にあなたの神様となるため、あなたが自分の人生を、本当に安心して生きることが出来るため、そのためにわたしは来たのだよ、わたしはどんな時もあなたの友なのだ、イエス様はおっしゃっているのだと思います。

その証拠に、イエス様は、私たちの身代わりとなって、十字架に架かって下さったのです。

### 【結】 キデロンの谷の向こうへと

1節にある、このキデロンの谷の「キデロン」とは、ヘブル語で「暗い」という意味だそうです。「暗い谷」です。けれども、弟子たちとその「**キデロンの谷の向こうへ出て行かれた**」とわざわざ書いてあります。これは意味深いと思います。キデロンの谷。闇を隠れ蓑にして、いつしかそこに安住してしまうような私たちです。けれどもそこに居ては、明るさは、喜びはないのではないのでしょうか。どこかでおびえてしまう人生。しかし、イエス様はそこから私たちを引っ張り出し、その「谷」の向こうへと私たちを導き、一緒に歩いて下さるお方です。

主は「十字架」から「復活」へと、私たちを伴って下さいます。感謝しつつ、この受難節を主の愛の中で過ごして行きましょう。

「わたしは決してあなたを離れず、あなたを捨てない」。

お祈りを致します。